方向音痴と存在感無し

橘潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

方向音痴と存在感無し

【コード】

N4907Y

【作者名】

橘 潤

【あらすじ】

方向音痴の少女と、存在感が無さ過ぎる少年のラブコメディ！
ラブが無さそうなのは気のせいです！

1st Day - 1 迷子の二人

春といえば連想するのは大体の人が桜だろう。だけど、四月には一部の地域の桜はほとんど散っていて、春という雰囲気はほとんどない。

次に思い浮かぶのは、学生だったら入学式や始業式、クラス替えだ。

彼女、宮坂詩織は今日から高校生だ。

上を見ればどんより曇った空。まるで彼女の今の心境を表しているみたいに。

「……………迷った」

迷っている場所は学校へ行く道ではなく、学校の敷地内だ。金持ち学校だからかなり広く、校門から校舎まで徒歩十分は掛かる。一本道ならまだマシだが、問題なのは分かれ道が多すぎる事と、木が多くて校舎が見えないからだ。

この学校 『私立岬ヶ丘高校』では、入学式直前にクラスを決める。理由は、受かった生徒が春休み中に予習復習をしているかどうか調べ、学力でクラスを決定するからだ。クラスは、頭が良い順にA～Eまで五つある。クラスごとに勉強の仕方が代わるわけではないが、部屋が微妙に違う。Aクラスはほとんど真新しいのに対して、Eクラスは壁に落書きがあつて汚い。

分かれ道が多いのは問題の書いてある看板を立てたりし、二択から四択の中から選ばせるためだ。これには更に理由があり、周りの人と相談し、友達を作りやすくするためだ。

こういうお金持ち学校にはプライドの高い生徒もあり、そのせいか、友達が誰一人出来ない事がある。こんな事をして、その性格が直るかは分からないが、少しでも良い方向に変わって欲しいという、学校側の考えだ。

分かれ道は広めの道ばかりなのだが、時々小道がある。広い道

を通っていけば迷わずに済むのだが、時々小道に入っただけで迷ってしまう生徒が居て、毎年迷子になる生徒が数名いる。その生徒達は全員方向音痴なのだが。

迷ったらその場で待機が一番良いのだが、一度迷ったら三時間は待たないと先生達が来てくれないため、ほとんどの人は自力で脱出を試みる。無事校舎に辿り着けるのは、その内の三分の一。残りは見つけてもらうまで待っている人が、校舎を素通りして更に迷う人だ。

「ここは一体どこなの？」

視界に入るのは花と草と木だけ。林の中にぽっかりと、きれいに出来た円い空間。人口でも、ここまでキレイな円を林の中に作るのは大変だ。

迷って一時間。歩くのも疲れ、その場に腰を下ろした。

微風が草木を揺らす音だけが耳に入る。驚くほど静かな空間。ここまで静かなのは寝る時以外はテストの時しかなかった。今と違うのは、寝る時もテストの時もちゃんと理由があった。

寝る時は音楽を掛けると眠れなくなるから、何もつけないでいる。受験の時は静かにしなくちゃカンニングとみなされ、教室を追い出されてしまう上に、全教科ゼロ点だ。

でも、今は違う。迷って見つけてもらうのを、ジッと座って待つしかない。

携帯や音楽機器、本はクラス分けテストがあるから持って来ちゃいけないかった。

最初に校門で荷物やポケットのものを調べられるのだが、過去にばれずにテストを受けた者がいて、教室内で使ってたのがばれてEクラスにされたらしい。その人は特に気にしていなかったそうだ。

相談はありなのに、辞書の類は持ち込み禁止とは、変わった学校である。

「暇ー！」

大声で不満をぶちまけた。やる事がなくて暇すぎる。

声に出した後、誰かに聞かれてないか心配になって周囲を見渡すが、誰も居ない。

「ホント、暇だよな」

誰も居ない事を確認してホッと息を吐いた瞬間、男性の声が聞こえた。

教職員や保護者は校舎に集まっているため、この場所に居る事は絶対にない。在校生も各々のクラスに居るため、この場所に居る者は必然と絞る事が出来る。同じ新入生で、迷子だ。

聞かれてた事が恥ずかしくなり、顔が赤く染まる。

振り返ると、茶髪で前髪は目より少し上、後ろは少し長い、あまり気にならない程度。瞳の色は髪より濃いダークブラウンで、顔はかなり整っていてイケメンだ。

「い、何時からいたの？」

「ん？ キミが『迷った』って言った時からその木の所に」

少年が指差した所は、ギリギリ詩織から見える位置。

二度も見渡したのに気付かなかった。

「俺の前を堂々と通って行ったから、気付いてるのかと思った」

「それって、貴方の存在感が薄すぎるだけじゃないの？」

最初から声を掛けてくれれば、恥ずかしい思いをしなかったのにも思い、本人が気にしていそうな事を口にした。

だが、少年は特に気にする風でもなく、「そうだよ」と言った。

この年で誰もが気にする事を考え、思いついた言葉を発した。

「貴方も迷子？」

「うん」

少年の素っ気ない返事で会話が続けられず、気まずくなる。だが、少年は気にしていなかった。

「わ、私も迷子なの…」

何とか笑顔で会話を続けようとするが、頬が引き攣ってる。

「さっき、『迷った』って言ってたから、分かるよ」

少年は冷静すぎた。詩織が相手も気まずいんだろっとな、と違って

会話を続けようとしたのに、すぐに終わらせるような返事をする。気まずい。気にしすぎだと分かっているとしても詩織には耐えられなかった。

ポツポツと、雨が降り出した。

「木の下に移動しようか」

少年の声に、詩織は小さく頷いた。

木の下では、全く雨に濡れなかった。木々が密集していて、木の葉が雨粒を受け止めているからだ。それでも、時間が経てば溜まった雨水が一気に落ちてくる。雨がすぐに止めばいいと思うが、今朝の天気予報では一日中雨だ。

二人で先生が探しに来るのを待つより、学校の校舎に向かったほうがよさそうだ。

「ねエ……」

少年が、小さな声で呼びかけてきた、詩織は少年の顔を見て少しだけ首を傾げ、次の言葉を待つ。

「君の名前、教えて」

「宮坂詩織」

「宮坂さんね。俺は片岸陸。同じEクラスだからよろしくね」

「え？」

少年 陸の言った最後の方の言葉に、詩織は疑問の声を口にした。

「もしかして……知らない？」

「何が？」

陸の問いに問いで返す。陸は頭を抱えたため息を吐いた。「学校案内、ちゃんと読んだ？」

1st Day - 1 迷子の二人（後書き）

文章がまだあまり上手くないから、余計なものの描写が入っているかも。

なるべく少女の思考を書いているんですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4907y/>

方向音痴と存在感無し

2011年11月14日03時23分発行